2022 年度「北里大学における学修等に関するアンケート」調査結果

高等教育開発センター員　前田　　崇

1．はじめに

「北里大学における学修等に関するアンケート」は 2008 年から実施されている学生調査である。本調査の目的は，学生の学修習慣，学修方法，授業への満足度，能力の自己評価等の変遷を経時的に調査することにより，本学における教育課題・学習課題を多岐にわたって抽出し，将来の教育改革に繋げることである。2021 年度から調査をオンラインで行っている。2022 年 11 月に各学部事務室を通じて調査サイトにアクセスするための URL と QR コードを配布し，期限とした 1 月 31 日までにウェブ上での回答を求めた。調査対象は北里大学の 7 学部に所属する学生全員である（悉皆調査）。

	回 答 数	対象者数	回 収 率
薬　学　部	708	1,735	40.8%
獣 医 学 部	575	1,563	36.8%
医　学　部	189	741	25.5%
海洋生命科学部	450	765	58.8%
看 護 学 部	257	518	49.6%
理　学　部	343	912	37.6%
医療衛生学部	1,328	1,705	77.9%

表 1　データの概要

2022 年度の調査は，昨年度までの，本学への進学理由，大学での学修経験・生活全般に関する実態と意識，大学に対する要望，アドミッション・ポリシーとディプロマ・ポリシー等の調査項目に，一般教育科目の学び直しやオンライン授業に関する設問を新たに加えて，全 36 問から構成された。本稿ではこれらの質問項目に関する回答結果のうち学生の学修に関する部分を中心に分析し，報告する。

2．データの概要

有効回答数は 3908，回収率は 49.2％であった。2021 年度の有効回答数は 3863，回収率は 49.0％で，昨年度と比較すると，有効回答数と回収率は横ばいであった。回収率に関しては学部別にばらつきがあり，最も回収率が高かったのは医療衛生学部で 77.9% であった。次に海洋生命科学部 58.8％，看護学部 49.6％，薬学部 40.8％，理学部 37.6％，獣医学部 36.8％と続き，医学部は 25.5% と低い回収率となった。

3．本学への進学理由

なぜ学生は本学に進学したのだろうか。問 2 で本学への入学動機に関して聞いているが，最も多い理由は「希望する職業につけるから」（62.3%）というものである。本学には職業

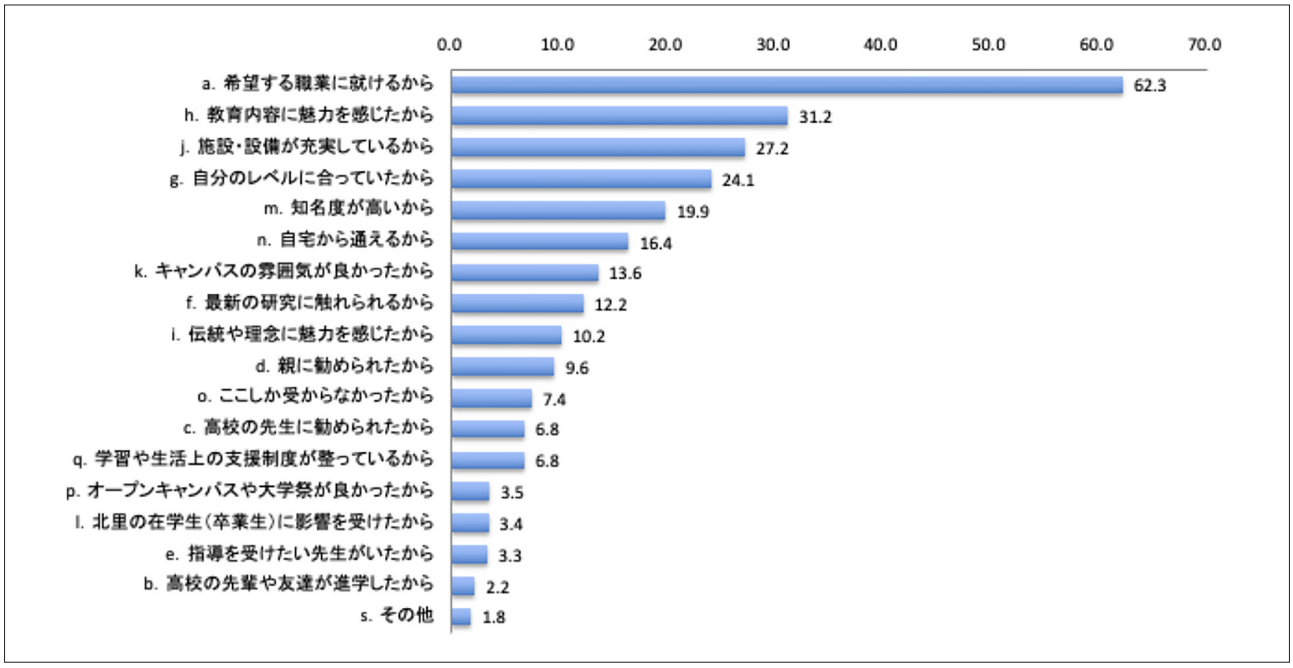

図 1　本学への入学動機（1 年生のみ・多重回答）（%）

	a. 希望する職業に就けるから	h. 教育内容に魅力を感じたから	j. 施設・設備が充実しているから	g. 自分のレベルに合っていたから	m. 知名度が高いから	n. 自宅から通えるから	k. キャンパスの雰囲気が良かったから	p. 最後の研究に触れられるから
薬　学　部	71.1	34.3	24.1	30.7	17.5	18.1	12.7	12.0
獣 医 学 部	53.4	37.2	20.9	26.7	15.7	5.2	11.5	8.9
医　学　部	61.5	17.3	17.3	23.1	7.7	23.1	7.7	9.6
海洋生命科学部	45.8	45.8	27.5	17.6	9.9	14.5	11.5	18.3
看 護 学 部	84.5	39.4	35.2	32.4	35.2	22.5	25.4	11.3
理　学　部	23.2	33.3	25.3	34.3	12.1	30.3	11.1	21.2
医療衛生学部	76.3	20.5	32.6	17.2	28.2	16.3	15.1	9.8

表２　本学への主な入学動機（１年生のみ・学部別・多重回答）（%）

	第一志望	第二志望	第三志望以下
薬　学　部	52.1	30.3	17.6
獣 医 学 部	51.8	28.3	19.9
医　学　部	31.4	19.6	49.0
海洋生命科学部	40.6	46.6	12.8
看 護 学 部	69.0	26.8	4.2
理　学　部	32.4	27.5	40.2
医療衛生学部	66.9	19.5	13.6
大学 (学部合計)	53.6	27.5	18.9

表３　本学の志望順位（１年生のみ・学部別）（%）

資格と学歴が直接的に結びついている医療系学部が複数あるため，こうした回答傾向は当然とも言えるが，やはり希望の職業につくために本学に進学している学生が多いことが確認された。次に「教育内容に魅力を感じたから」(31.2%)，「施設･設備が充実しているから」(27.2%)，「自分のレベルに合っていたから」(24.1%)，「知名度が高いから」(19.9%) と続く。「キャンパスの雰囲気が良かったから」(13.6%)，「オープンキャンパスや大学祭が良かったから」(3.5%) というように，大学の教育内容や雰囲気，学生文化に興味関心や親和性を持ったことが本学への進学の動機になっている学生もおり，こうした取り組みが受験生に影響を与えていることがわかる。

全体では「希望する職業につけるから」という回答が最も多かったが，これを学部別にみると回答傾向が大きく異なる。「希望する職業につけるから」の回答率が最も高いのは看護学部で 84.5%，次いで医療衛生学部の 76.3%，薬学部 71.1%，医学部 61.5％と続く。やはり学歴が職業資格に直接的に結びつく医療系学部では「希望する職業につけるから」という動機で本学に入学する学生が多い傾向がみられる。こうした傾向とは対照的に，医療系以外の学部においては，「希望する職業につけるから」の回答率は，獣医学部 53.4%，海洋生命科学部 45.8%，理学部 23.2% という結果であった。獣医学部獣医学科を除いて，これらの学部では必ずしも学歴が職業資格と直接的に結びついていないため，こうした入学動機を持つ学生は多くないと考えられる。それに対して，「教育内容に魅力を感じたから」という項目を選んだ学生の比率はこれらの学部で比較的高く，海洋生命科学部 45.8% である。

本学への志望順位は第一志望が 53.6% と最も多く，次に第二志望 27.5%，第三志望以下 18.9% であった。志望順位も学部によって違いがあり，医療系学部は医学部を除いて第一志望の比率が高く，医療系以外の学部では第一志望の比率が相対的に低い傾向がみられた。

４．授業への取り組み

ここでは学生の授業への取り組みや学び方をみていく。

まず学生の授業への取り組み方に関しては，「興味のわかない授業でもきちんと出席する」や「なるべく良い成績をとるようにしている」の項目は，「あてはまる」と「ある程度あてはまる」を合わせた肯定回答が多く，それぞれ 93.3％と 87.9％であった。まじめに授業に出席することやなるべく良い成績をとろうとする姿勢が多くの学生にみられた。それに対して，「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」(肯定回答 77.7％)，「必要な予習や復習はしたうえで授業に臨んでいる」(肯定回答 57.2％)，「先生に質問したり，勉強の仕方を相談したりしている」(肯定回答 51.2％) のように，より積極的な学習姿勢を聞いた項目に関しては，肯定回答が低くなる傾向がみられた。本学の学生の多くはまじめに授業に出席し，なるべく良い成績をとろうとしてはいるものの，授業に対してやや受け身の姿勢が見られ，積極性や能動性を十分に発揮しているとは言えない学生もみられる。

次に，大学での学び方に関して，本学の学生はどのような考えを持っているのであろうか（図 3)。科目の必修と選択に関しては，「授業のとり方はあらかじめ決まっているほうがよい」の肯定回答が 52.2% であるのに対して，「授業は自分の好きなようにとりたい」の肯定回答は 57.8% であり，

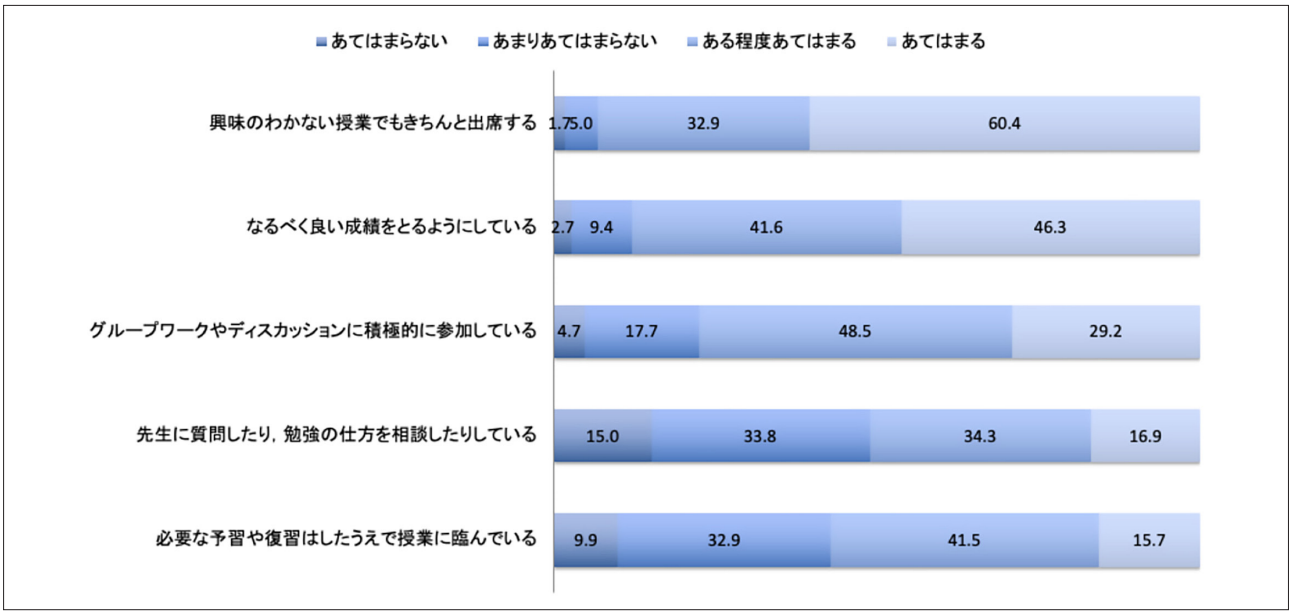

図２　学生の授業への取り組み方（%）

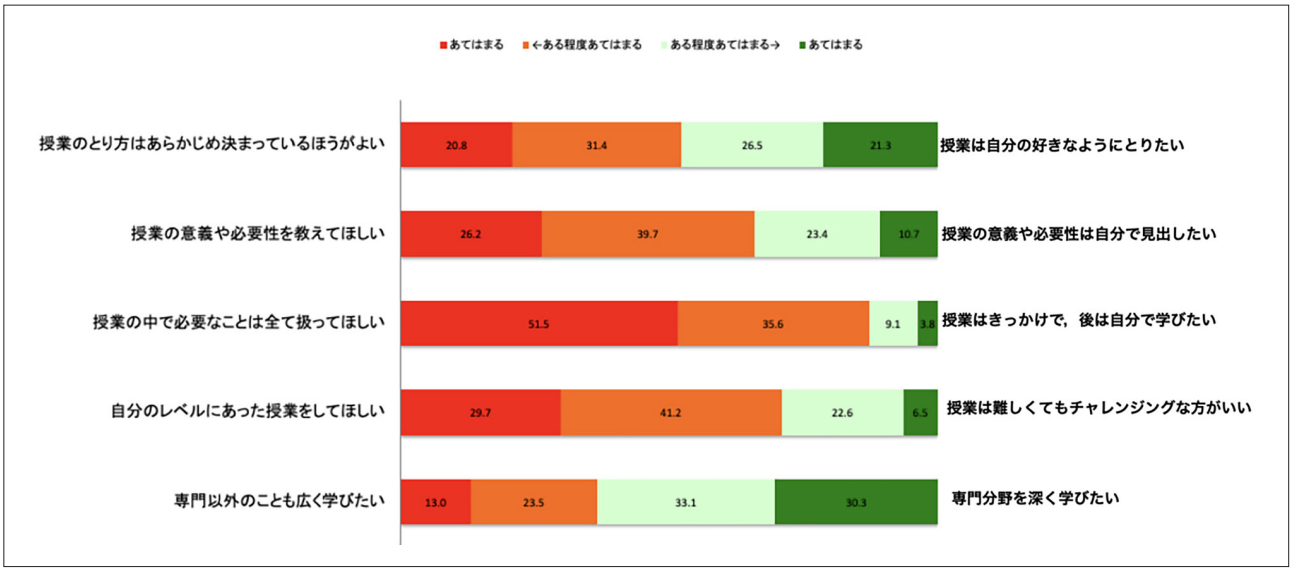

図３　大学での学び方に関する学生の意識（%）

自由に科目を選択したいという学生のほうがやや多い傾向が見られた。授業の意義に関しては，「授業の意義や必要性を教えてほしい」の肯定回答が 65.9％であるのに対して，「授業の意義や必要性は自分で見出したい」の肯定回答は 34.1%と，授業の意義や必要性を教えて欲しいという学生の方が多い傾向がみられた。授業で扱う内容に対する学生の意識に関しては，「授業の中で必要なことは全て扱ってほしい」の肯定回答が 87.1% と約 9 割に達しており，「授業はきっかけで，後は自分で学びたい」の肯定回答 12.9% を大きく上回った。また，授業の難易度について聞いた項目に関しても，「自分のレベルにあった授業をしてほしい」の肯定回答が 70.9％と過半数を越え，「授業は難しくてもチャレンジングな方がいい」の肯定回答は 29.1％にとどまった。専門分野と専門以外の分野の学習に関しては，「専門分野を深く学びたい」の肯定回答は 63.4％であり，「専門分野以外のことも広く学びたい」の肯定回答は 36.5％であった。どちらかといえば専門志向の学生が多く，深い専門性よりも幅広い教養を重視する学生は 4 割弱にとどまった。

5. これまでの授業経験

問 5（1）において 8 項目にわたって授業経験について聞いている（図 4）。「授業内容に興味がわくよう工夫されている」（肯定回答 87.5％），「理解がしやすいように工夫されている」（肯定回答 88.3％），「出席が重視される」（肯定回答 78.6％），「最終試験の他に小テストやレポートなどの課題が出される」（肯定回答 87.1％）といった項目は「よくあった」，

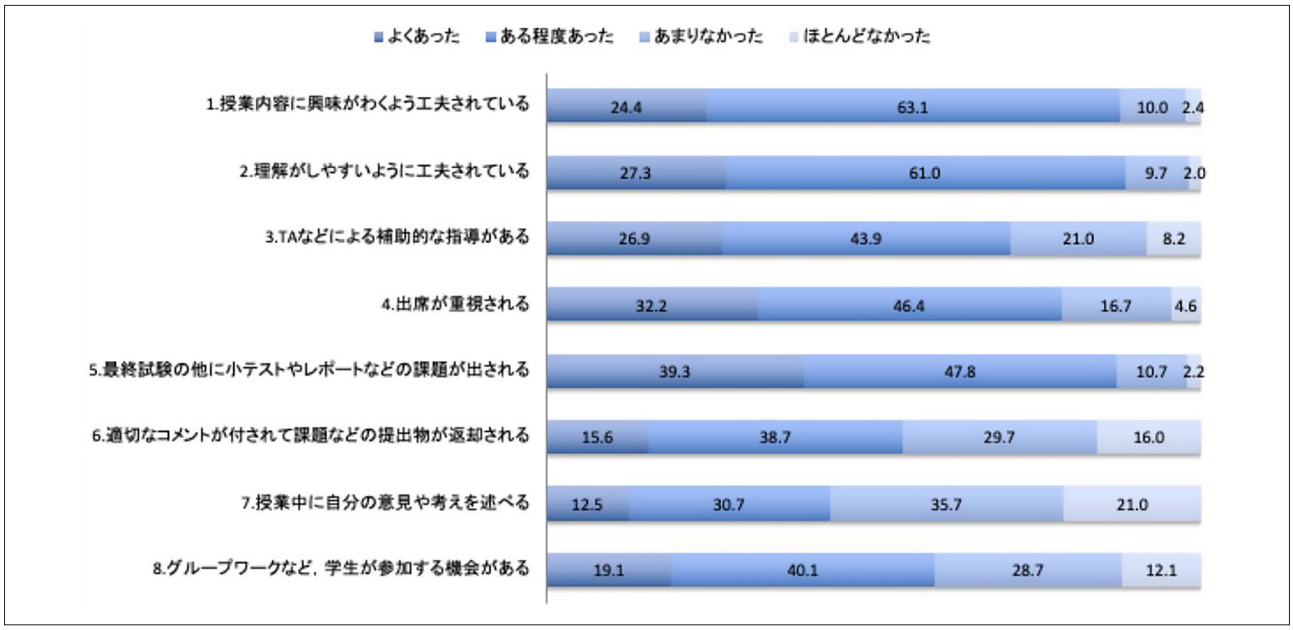

図４　授業上の経験の有無（%）

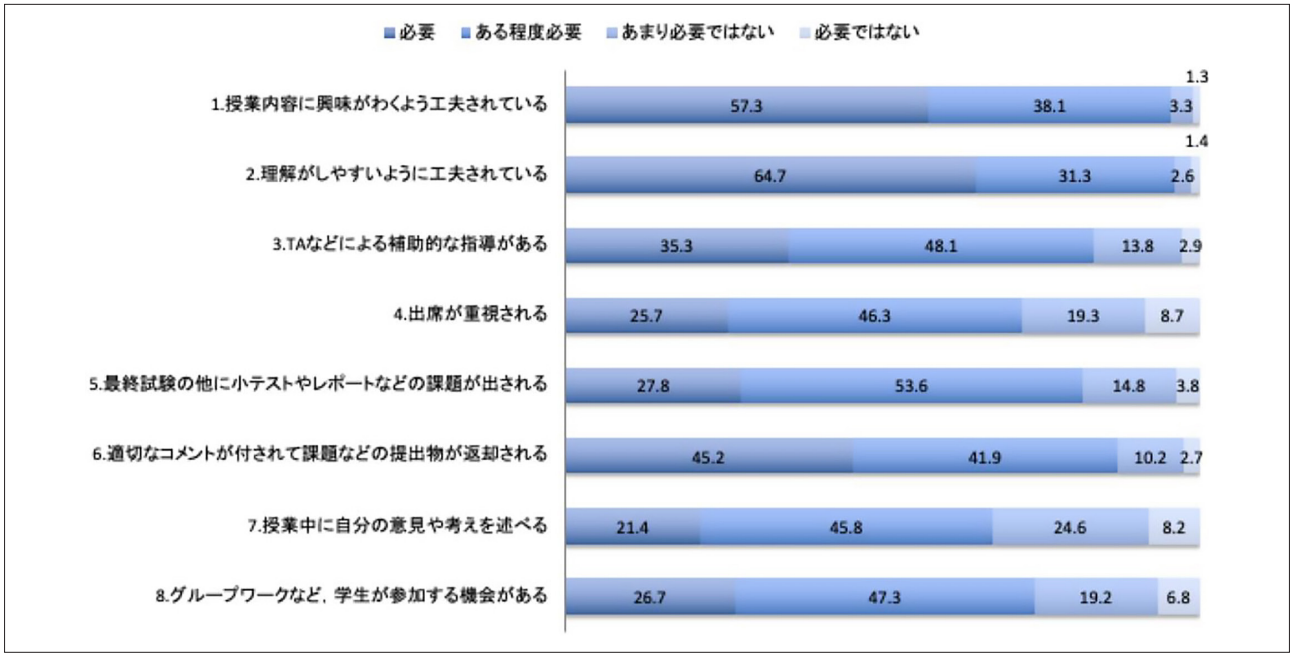

図５　授業に必要なこと（%）

「ある程度あった」という肯定回答の比率が高く，ほとんどの学生が経験していた。それに対して，「授業中に自分の意見や考えを述べる」や「グループワークなど，学生が参加する機会がある」という学生の授業参加に関わる項目に関しては，肯定回答がそれぞれ 43.2%，59.2%と相対的に低い傾向がみられた。「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」に関しては，肯定回答が 54.3%と 5 割強程度であり，他の項目と比較すると，提出物に対する個別のフィードバックの経験はやや低い傾向がみられた。

問 5（2）において，同じ 8 項目の経験の必要性を聞いている（図 5）。学生はこうした経験をどの程度必要であると考えているのだろうか。

「授業内容に興味がわくよう工夫されている」（肯定回答 95.4%），「理解がしやすいように工夫されている」（肯定回答 96.0%）とこの二つの項目に関しては，ほとんどすべての学生が必要であると考えている。次に「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」（肯定回答 87.1%），「最終試験の他に小テストやレポートなどの課題が出される」（肯定回答 81.4%）の肯定回答が 8 割を越え，「TA による補助的な指導がある」（肯定回答 83.4%），「出席が重視される」

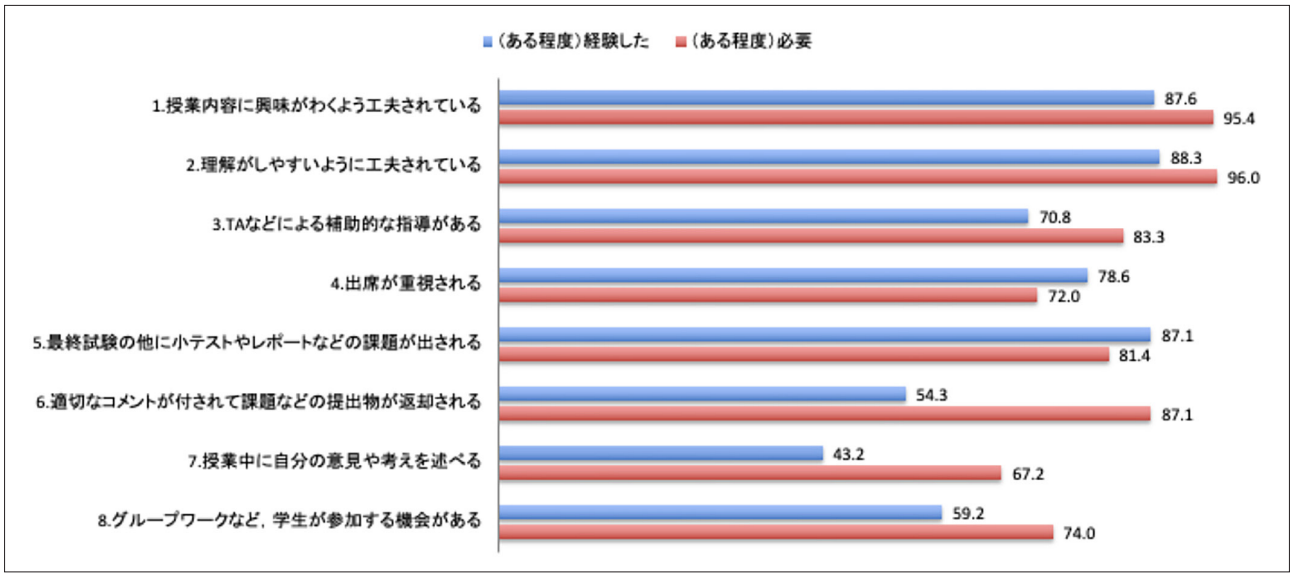

図６　授業での経験と必要性の比較（%）

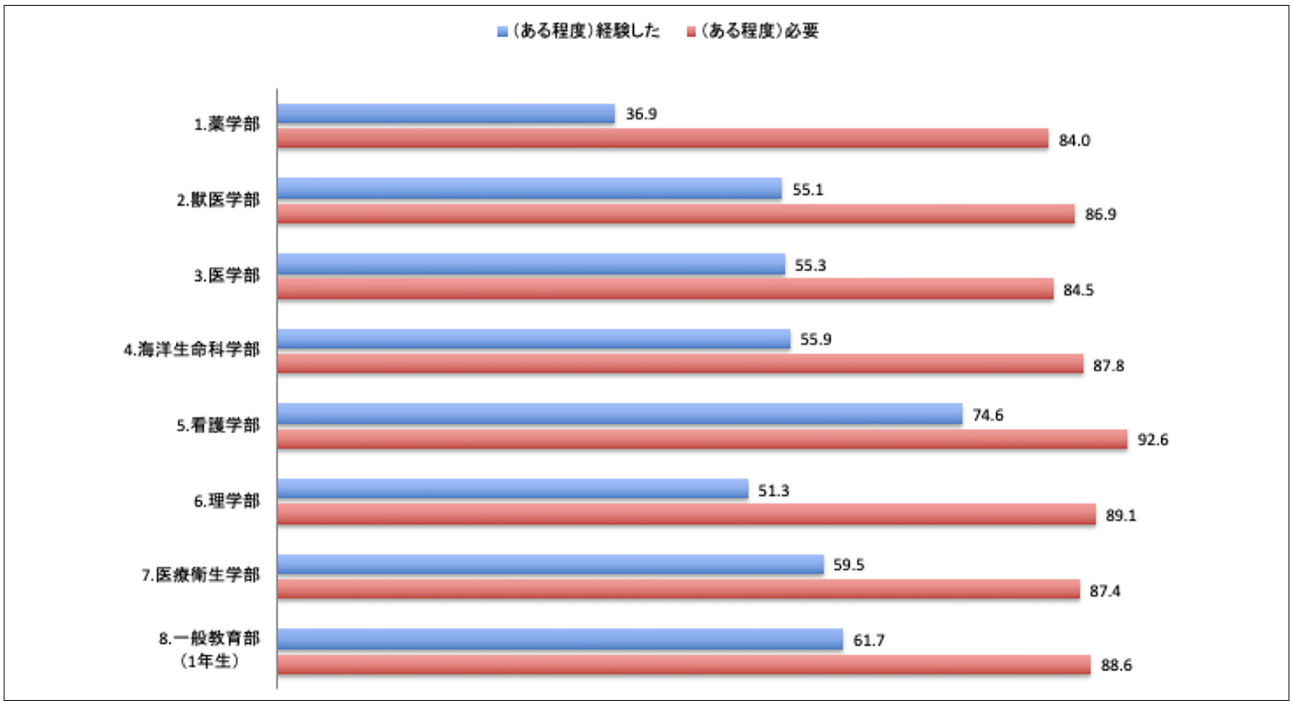

図７「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」に関する授業での経験と必要性の比較（%）

（72.0％）が続いた。「グループワークなど，学生が参加する機会がある」，「授業中に自分の意見や考えを述べる」という学生の授業参加に関わる項目に関しては，肯定回答がそれぞれ 74.0％，67.2％と，他の項目と比較して相対的にやや低い傾向がみられた。

上記の授業での経験と必要性を比較すると，学生が必要であると考えているにも関わらず，実際の授業では経験できていない項目が浮かび上がる（図 6）。

最も差が大きかったのは，「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」であった。学生の多くがこうした「フィードバック」を求めているが，実際の授業では十分に実施されていないことが明らかになった。

ただし，これも学部別で違いがある（図 7）。最もこうした指導がなされていると考えられるのが看護学部，一般教

1　一般教育部の値に関しては，一般教育部に所属する学生がいるわけではないため，一年生の回答を一般教育部の代理指標として集計した。これ以降の一般教育部の値に関しても同様である。

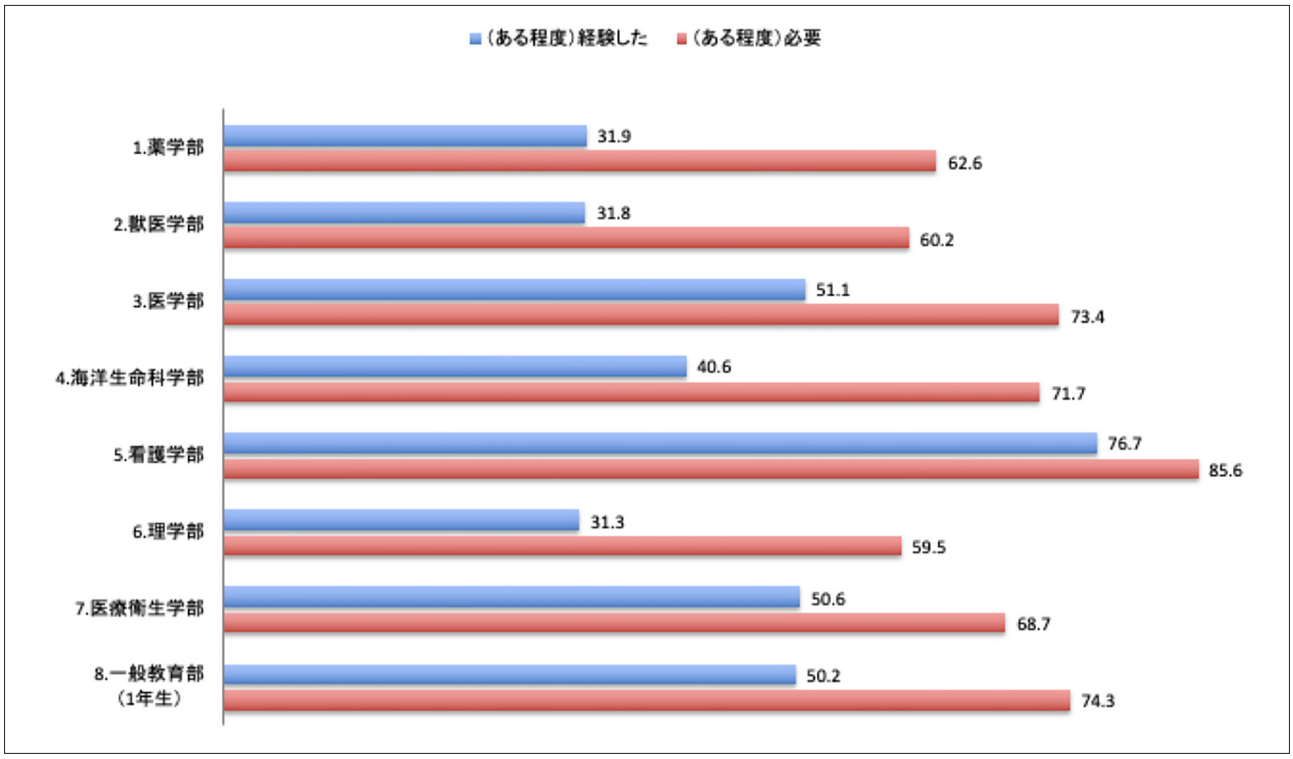

図８ 「授業中に自分の意見や考えを述べる」に関する授業での経験と必要性の比較（%）

育部，医療衛生学部で，（ある程度）経験したという肯定回答がそれぞれ 74.6%，61.7%，59.5%に達した。次に，海洋生命科学部 55.9%，医学部 55.3%，獣医学部 55.1%，理学部 51.3%と続く。薬学部は 36.9%と，こうした指導があまり活発になされていないといえよう。それに対して，学生の「フィードバック」を求める意識は学部による違いはあまりなく，学部に関わらず，ほとんどの学生が「フィードバック」を求めていると考えられる。

実際には，受講生の多い授業では，実行可能性の観点から一人ひとりの学生に個別にフィードバックするのは容易ではないが，多くの学生がつまずいたポイントや改善点などを学生全体に対してフィードバックすることは可能であろう。なお，本調査データを踏まえた教育改善の一例をあげると，一般教育部において，2019 年度の本調査の結果を踏まえて部局内で検討され，授業においてこうしたフィードバックを推進することになった。さらに，2020 年度からはシラバスにフィードバックについて明記することが必須となり，授業において学生に対して積極的にフィードバックを行うことになった。

ところで，近年，「アクティブ・ラーニング」と呼ばれる教育方法が注目されており，中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ－（答申）』（2012 年 8 月 28 日）においても言及されている。「アクティブ･ラーニング」とは，「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」であり，「学修者が能動的に学修することによって，認知的，倫理的，社会的能力，教養，知識，経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習等が含まれるが，教室内でのグループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク等によっても取り入れられる」（中央教育審議，2012）という。

また，メタアナリシスや各種の調査において，アクティブ･ラーニングやフィードバックの教育効果が明らかになっている。例えば，Hattie2009=2018 や Freeman,et al2014 のメタアナリシスでは，フィードバックに高い教育効果があることや，アクティブ・ラーニングにポジティブな教育効果があることが示されている。また，国立教育政策研究所による大学を対象とした，国内の調査結果の分析では，グループワーク等の形態の授業を多く経験するほど，授業出席や授業外学習時間が長いことが指摘されている（深堀聰子研究代表『学生の成長を支える教育学習環境に関する調査研究』国立教育政策研究所。）。

本調査においても，「授業中に自分の意見や考えを述べる」や「グループワークなど，学生が参加する機会がある」のように，学生が授業に参加する機会に関する設問を設けている。多くの学生がこうした機会が必要であると回答しているが，十分に実施できているとは言えない（図 8，9）。

ただし，「フィードバック」の経験と同様に，こうした意識や経験に関しても，学部別に違いがみられる。「授業中に

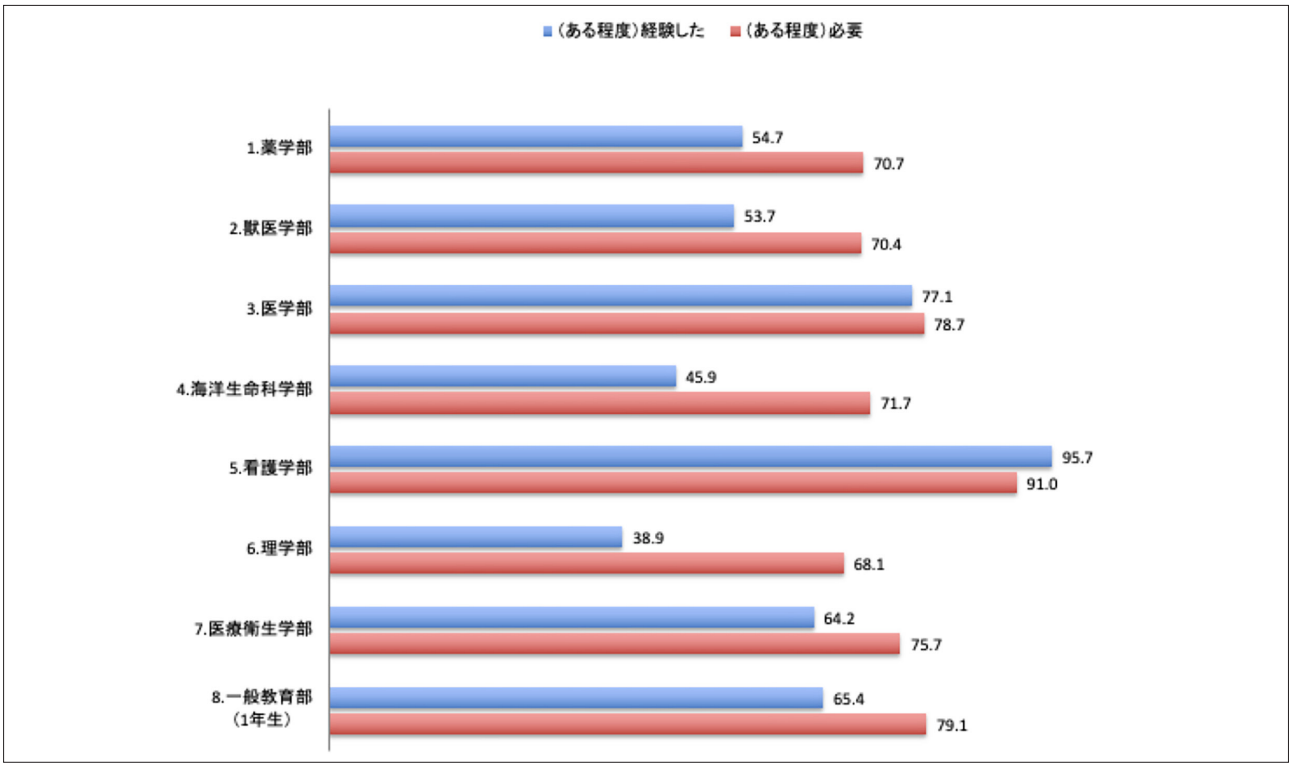

図９　「グループワークなど，学生が参加する機会がある」に関する授業での経験と必要性の比較（%）

自分の意見や考えを述べる」という項目に関して，看護学部，医学部，医療衛生学部，一般教育部では，（ある程度）経験したという肯定回答がそれぞれ 76.7％，51.1％，50.6％，50.2％に達しているが，，海洋生命科学部，薬学部，獣医学部，理学部は 40.6％，31.9％，31.8％，31.3％にとどまっている。

グループワークに関しても，最も実施されていると考えられるのが看護学部で，肯定回答（「ある程度経験した」＋「経験した」）の比率が 95.7％に達した。次に，医学部 77.1％，一般教育部 65.4％，医療衛生学部 64.2％，薬学部 54.7％，獣医学部 53.7％，海洋生命科学部 45.9％と続く。理学部は 38.9％，と，こうした指導があまり活発になされていないといえよう。しかし，学生の授業参加を求める意識は，学部による違いはそれほど大きくなく，学部に関わらず，多くの学生が自分の意見や考えを述べることやグループワークなどの授業参加を求めていると考えられる。

ただし，「授業内容に興味がわくよう工夫されている」（肯定回答 95.4％），「理解がしやすいように工夫されている」（肯定回答 96.0％）のように 9 割以上の肯定回答がみられる項目とは違い，自分の意見や考えを述べることやグループワークに対する肯定回答は 6 ～ 9 割程度であり，約 1 ～ 4 割の学生は自分の意見や考えを述べることやグループワークなどの積極的な授業参加を求めているわけではない。学生の中にはグループワークのような「アクティブ」な教育方法に負担感や苦手意識を持つ者もいるのではないかと推察される。

また，各学部学科や各科目の教育目的・教育目標や S-T 比などには大きな違いがあるため，アクティブ・ラーニングを実施することが教育目標を達成するために適切かどうか，あるいは，実行可能かどうかをよく検討する必要があるだろう。

表 4 は 2019 年における本学の学生数，教員数，S-T 比（学生数を教員数で除した値）を示したものである。医学部は S-T 比が最も低く 0.7 である。次に，看護学部 10.8，薬学部 13.6，医療衛生学部 14.2 と医療系の学部が続く。それに対して，理学部 17.3，獣医学部 18.1，海洋生命科学部 23.6，

	学生数	教員数	S-T 比 （学生数 / 教員数）
薬　学　部	1,698	125	13.6
獣 医 学 部	1,703	94	18.1
医　学　部	747	1,098	0.7
海洋生命科学部	756	32	23.6
看 護 学 部	508	47	10.8
理　学　部	900	52	17.3
医療衛生学部	1,667	117	14.2
一 般 教 育 部	1,792	56	32.0

表 4　本学の学生数・教員数・S-T 比 [2]

2　学生数に関しては，「2019 年度学生在籍者数調（2019 年 11 月 1 日現在）」による。教員数に関しては，「在籍人員表（2019 年 7 月現在）」による。

一般教育部 32.0 は，医療系学部に比べるとやや S-T 比が高い傾向がみられる。一般的に, S-T 比が低い方がフィードバックやアクティブ・ラーニングの実施率が高いことが知られている（河合塾 2019）。実行可能性の観点からも，大人数の講義ではアクティブな教育方法を用いることが困難であることは経験的に容易に想像することができるだろう。

本学の場合，看護学部，医学部，医療衛生学部といった医療系学部では，グループワークなどのアクティブ・ラーニングに関わる項目を経験したという肯定回答が高い傾向があるが，このような S-T 比の違いや，医療系学部の教育目的・教育目標とアクティブ・ラーニングの手法が親和的である点などが関係しているのではないかと考えられる。

6. おわりに

今回の調査と分析の結果は以下の 2 点に整理することができる。

第一に，学生は教員からの「フィードバック」を求めているが，十分に実施されているとはいえない（一般教育部を含めた全学部）。

第二に，獣医学部，海洋生命科学部，理学部，薬学部，医療衛生学部, 一般教育部の学生は, よりアクティブな学習（自分の意見や考えを述べる，グループワークなど）を求めている。アクティブ・ラーニングに関しては，これらの学部・部局においては，こうした教育方法を実施することが教育目標を達成するために適切かどうか等を検討した上で，必要であれば，実施するための環境を整備し，より積極的に実施していくことが求められる。

本報告で記述・分析した項目以外の集計結果に関しては，資料として文末に基礎集計をまとめた「データ集計表」を掲載したので，そちらを参照していただきたい。自由記述の回答に関しては，学外には公表していないが，学内の各学部には報告されている。こうした調査結果の中には，学習の当事者である学生の貴重な意見として耳を傾けるべきことも多い。また，例えば，医学教育分野では，グローバルな医学教育の評価基準（基本的水準）として，以下のように「学生の参加」が設定されている。

「4.4 学生の参加
基本的水準 :
医学部は，学生が下記の事項を審議する委員会に学生の代表として参加し，適切に議論に加わることを規定し，履行しなければならない。
・使命の策定（B 4.4.1）
・教育プログラムの策定（B 4.4.2）
・教育プログラムの管理（B 4.4.3）
・教育プログラムの評価（B 4.4.4）
・その他，学生に関する諸事項（B 4.4.5）」（日本医学教育評価機構 2019）

学習の当事者である学生の意見を踏まえて，本学の教育が改善されることが望まれる。

＜主要参考文献＞

Scott Freeman, Sarah L. Eddy, Miles McDonough, Michelle K. Smith, Nnadozie Okoroafor, Hannah Jordt, and Mary Pat Wenderoth（2014）Active learning increases student performance in science, engineering, and mathematics,PNAS 111（23）8410-8415.
深堀聰子研究代表『学生の成長を支える教育学習環境に関する調査研究』国立教育政策研究所。https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div05-koutou.html#project001
ジョン･ハッティ著, 山森光陽監訳 (2009=2018)『教育の効果』図書文化社。
河合塾『Guideline　2019 年 7・8 月号』
https://www.keinet.ne.jp/magazine/guideline/backnumber/19/0708/shiten.pdf
日本医学教育評価機構（2019）『医学教育分野別評価基準日本版 Ver.2.32 世界医学教育連盟（WFME）グローバルスタンダード 2015 年版準拠』
https://www.jacme.or.jp/pdf/wfmf-jp_ver2.32.pdf